

絵画土器のメッカ、唐古・鍵遺跡と清水風遺跡

天理大学文学部教授
桑原 久男 Hisao Kuwabara

平成 29 年 (2017 年)、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館で開催された特別展「新作発見! 弥生絵画 一人・動物・風景一」では、各地の弥生時代遺跡から出土した絵画土器や絵画銅鐸などが展示され、266 点の「弥生絵画」が一堂に会した。なかでも存在感を發揮していたのは、唐古・鍵遺跡と、その北方 500 m に位置する清水風遺跡で、両遺跡の出土資料だけで 93 点を数えた。数字の偏りは、この特別展が唐古・鍵遺跡の発掘 80 周年を記念した企画だったことによるのではない。40 数年にわたって唐古・鍵遺跡の調査研究に取り組む藤田三郎氏の計算では、全国の絵画土器の総数を 800 点前後として、唐古・鍵遺跡が約 350 点、清水風遺跡が約 50 点と、ほぼ半数がこの



写真 唐古・鍵考古学ミュージアムに
展示された絵画土器

2 遺跡に集中しているのだ。また、唐古・鍵と清水風を除けば、10 点以上の絵画土器が出土した遺跡はほとんどなく、両遺跡の特殊性が際立っている。

唐古・鍵遺跡の絵画土器第 1 号となったのは、大正 12 年 (1923 年)、梅原末治氏が『人類学雑誌』で紹介した土器片だ。唐古遺跡の知名度を全国的に高める契機となったその絵画土器について、梅原氏は、大形の壺と思われ、篋^{へら}描きで、角を有した大小 2 頭の鹿を描き、全形がわかる小さい鹿は、首が細長く、体部は粗い格子文で体毛を表す、との描写を行った。格子文が体毛を表現したものでどうかの問題が残るが、「よく鹿の特徴があらわれている」という梅原氏の評価は妥当だろう。森本六爾氏も、「明確に且つ正確に特徴を表している」としつつ、鹿が狩猟の対象として描かれたと論じている。

昭和 12 年 (1937 年) の唐古池の発掘調査でも、有名な「船を漕ぐ人物群」、「高床建物の梯子を登る二人の人物」などの絵画土器片が、池の北側を横切る「北方砂層」から出土した。「北方砂層」は、三輪山方面からの洪水砂によって河道が埋没したもので、砂層に多量に含まれていた第 4 様式 (弥生時代中期後半) の土器のなかに、絵画土器が含まれていたのだ。報告書では、小林行雄氏が、絵画土器と銅鐸の緊密な関係を再確認するとともに、絵画土器が第 4 様式に限って行われた事実を注意している。

戦後しばらくは、唐古遺跡は本格的な発掘調査が行われることがなく、昭和 52 年 (1977 年)、唐古池の南 100 m に位置する幼稚園校舎の新築に伴って、橿原考古学研究所が実施した第 3 次発掘調査が大きな転機となった。その調査で 2 条の環濠が発見され、遺跡の範囲が大きく拡大することが明確になったため、遺跡の名称が唐古・鍵遺跡と正式に改められた。その後、田原本町の依頼により、橿原考古学研究所が 3 年間にわたり、範囲確認等を目的とした発掘調査を実施した。さらに、昭和

57 年 (1982 年) からは、調査体制の整備を行った田原本町が、発掘調査を引き継ぎ、現在までの調査回数は、130 回に及ぼうとしている。

私が学生時代、アルバイトとして発掘調査に参加していた昭和 60 年代頃 (1980 年代後半) は、ちょうどバブルの時代に差し掛かったこともあり、国道沿いの開発案件がたびたび持ち上がっていた。それに対応する緊急調査でも、貴重な遺構や遺物が次々に出土していたが、絵画土器に関しても大きな発見があった。昭和 60 年 (1985 年) の第 22 次発掘調査 (1985 年) では、人物、鹿、建物などの図像を描いた土器片がばらばらで出土したのだが、破片が接合し、大きな壺形土器の肩部に、絵巻物のように図像群が配置されていることが明らかになったのだ (写真左奥)。また、平成 3 年 (1991 年)、「楼閣」を描いたと見られる絵画土器片が発見され、それに基づいて、平成 6 年 (1994 年)、唐古池の南西隅に復元された木製の楼閣は、今やすっかり遺跡のシンボルとなっている。

一方、平成元年 (1989 年)、橿原考古学研究所が行った清水風遺跡の発掘調査では、「鳥装のシャーマン」を描いた絵画土器などが発見されて、注目を集めた。絵画土器片が数多く出土した第 4 様式期 (中期後半) の河道は、唐古池を横切る「北方砂層」の延長にあり、土器の保存状態が極めてよいことから、近辺で用いられた土器などが洪水砂に押し流されて瞬時に埋没した可能性が高い。清水風遺跡の絵画土器でとくに興味深いのは、平成 8 年 (1996 年) の第 2 次調査で、同じ河道から出土した 1 点の絵画土器だ (写真右奥)。その絵画土器には、建物、盾と戈をもつ人物、魚、鹿などの図像が絵巻物風に描かれていて、数ある弥生絵画の中でも、極めて重要な資料となっている。さらに、昨年の小規模な調査では、「両手を広げた人物」の絵画土器が出土し、乳房が表現されていることが話題となった。

このように、唐古・鍵、清水風の両遺跡から出土した約 400 点の絵画土器は、多年にわたる地道な発掘調査の積み重ねによるものなのだ。しかし、全国の絵画土器の半数が、この 2 遺跡に集中する事実は重く、絵画土器の性格を考える上でも、また、両遺跡の特殊性を考える上でも極めて重要だ。両遺跡の絵画土器は、藤田氏が指摘するように、図像の表現や器種などに共通性が見られ、一つのまとまりとして捉えられる。各図像の表現は、不明のものも存在するが、人物・動物・建物・船など、モチーフの特徴をよく捉え、現代の我々が見ても何を描いたかがすぐにわかる。とくに鹿図像については、かつて梅原氏が描写したように、他地域のもの比べると、表現が複雑なものになっていて、両遺跡が絵画土器の中心地であることの一つの証左となっている。

両遺跡の代表的な絵画土器は、6 月 2 日に再開館した唐古・鍵考古学ミュージアムの常設展示で見ることができる。しかし、4 月 18 日～5 月 31 日に開催予定だった企画展「よみがえる弥生の祭場—唐古・鍵遺跡と清水風遺跡—」は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、秋以降に延期となっている。今は、企画展が無事に開催され、多くの絵画土器と再会できることを祈るばかりだ。